

## “The Plumed Serpent” について (2)

平野竹信

ホテルからケイトがモーターボートでサユラ村へ湖を渡っていくとき、「人間の機械的行動」man's automatism から解放されて神秘的な生の世界を求める彼女の中にさらに新たな意識が目覚めるのを私たちは目撃することになる。

ボートが過去に要塞や流刑場であった小島のそばを通り過ぎる時、ケイトは現在廃墟と化したこの島に邪悪さを感じる。島の不吉な印象を契機としてケイトの心に不安の影が広がり、そのなかで彼女は彼女が西洋人としてこれまで信じてきた個我「I」が幻想であることに思い至る。「それぞれ個人は完全な自己、完全な魂、完成された自我をもっているものと考えていた。ところが、いま彼女は、まるで自分が新しい人間に変わったかのように、そうではないことを知った。男も女も、漠然と少々でたために寄せ集められた断片から成り立つ不完全な自己をもっているのだ。人間は完成品として創造されたのではない。今日の男たちは未完成であり、女たちも未完成である。」<sup>1)</sup>

鱸でモーターボートを操る先住民の男も彼女の伴をしてきた舳先に座る先住民の男も、今ケイトにはこのような未完成な人間であると実感される。そのために、ケイトは襲われるかもしれないという女性としての恐怖を二人の男に覚える。彼らは「崩壊と死への意志をもった未完成の動物」a half-being, with a will to disintegration and deathであり、「いちだんと純粹なものを破壊できる力を心得ている未完成の動物」a part-thing, which knows its power to destroy the purer thingであった。このとき、彼女の心に生じた恐怖に打ち勝つためにケイトは湖上の熱い大気のなかに在る「大いなる神秘」the greater mystery、「高次の力」the higher power、「大気の中に潜み漂う静かな生命の息吹」the silent life-breath which hung unrevealed in the atmosphere に向かって魂からの声を上げる。これによって彼女は空から彼女の内部に「豊かな充実感」the fullness、「平

安」the peace、「力」the power が降りてくるのを感じ、恐怖から解き放たれる。

メキシコの原住民と直面して、ケイトは西洋人の持つ「個我」の崩壊を経験する。前述したように、西洋人であるケイトにとって個の自立的存在は生の基本的要件であるが、野蛮な、「未完成な」メキシコの原住民には西洋的な「個我」という観念が存在しないので、ケイトが彼らと出会ってその観念の喪失を経験するのは当然なことである。なぜならこのような観念の遣り取りは西洋文明の同じ思想的文化的土壌で育ってきた人間同士の間でのみ可能であると思われるからである。

ここで注目すべきはケイトがその窮境からの救いをイエス・キリストやキリスト教の神にではなく、大気のなかにある「別の存在」the other presence に求めていることである。

ローレンスは『メキシコの朝』Mornings in Mexico の紀行集のエッセイのなかで、アメリカ大陸の先住民族—古代のペルー人やアステカ人やアパッチ族やナバホ族のインディアンなどが信仰した宗教は物活論的な宗教 animistic religion であることに言及し、その宗教には「唯一の神は存在しない。創造主もいない。偉大なる神は全く存在しない。なぜならすべてものは生きているからだ。」There is no One God. There is no Creator. There is strictly no God at all because all is alive.<sup>2)</sup>と語っている。このローレンスの言葉はキリスト教と科学的機械論的思考を支柱とする西洋文明の世界とは全く異質な世界、宇宙のすべてのものが生きているという古代の物活論的な世界の意識が西洋人であるケイトの意識のなかに入ってきていることを告げている。現地の先住民の中に神秘的な生を見出しただけでなく、メキシコの自然の大気の中に彼女が魂を開けばそれに応える神秘的な「生の息吹」the life-breath が隠れ潜んでいることに気づいた経験はまた、彼女に新たな生の可能性を開示するものであった。

勿論ここで指摘するまでもないが、ケイトの新たな生の意識の獲得は彼女の西洋人としての古い意識の消滅を意味することであるので、ケイトの内部でこの二つの意識は激しく対立する。<sup>3)</sup>アメリカ大陸の古代文明が有したアニミズム的な生の意識、生の在り方が西洋人であるケイトの意識の中に徐々に浸透していく過程を私たちは物語の展開とともに見ていくことになるが、その過程のなかでケイトの心は常にこれら二つの意識の振幅の間で揺れ続ける。例えば、こ

のあとの広場の場面でケイトが見せる、メキシコインディアンの男たちに心惹かれると同時に反発を感じる彼女の矛盾した心の動きはこの揺れを反映したものである。

さて、ケイトはサユラ村に到着すると、村のホテルに行く。そして彼女はホテルの女主人からドン・ラモンがすでに借家を手配してくれているのを知る。彼女はその借家を見て気に入り、そこに身を落ち着けることにする。このようにしてケイトのサユラ村での生活が始まる。この借家には家付き女中という格好でフアナ Juana というメキシコ女がすでに屋敷の内に住みついていたが、ケイトは追い出すことはしないで、そのまま雇うことにする。「フアナは歳が四十ぐらいで、背はやや低く、ふっくらした浅黒い顔に焦点のない黒っぽい目をし、髪はだらしなく、足を引きずるようにして歩く女であった。」 Juana was a woman of about forty, rather short, with full dark face, centreless dark eyes, untidy hair and a limping way of walking. この女中がケイトを Niña(女主人を呼ぶときの尊称)と呼ぶとき、ケイトはその声の中に「意地の悪い嘲りのかすかな調子」 a slight note of malevolent mockery を感じるが、また「現地メキシコ人の熱烈な温かさや特有な無欲の寛大さ」 passionate warmth and the peculiar selfless generosity of the natives を彼女の中に見出し、またホテルの主人から彼女の正直さを保証されて、ケイトはフアナとなんとかやっけていこうと心に決めるのだった。

サユラ村に身を落ち着けたケイトは、ある土曜日に村の広場へフアナを連れて出かける。サユラ村はちょっとした湖岸の行楽地のような風情をもっていて、週末は近隣の村々から人々が大勢やって来て、その広場には屋台や露店などの店も並び、かなりの賑わいを見せるのであった。ケイトが出かけた土曜日も、次の日の日曜日に朝市が立つこともあり、夜になっても広場にはまだ多くの人が残っていた。そして夜の九時頃になって、ケイトは広場の一角から響いて来る太鼓の音を耳にし、男たちがその音が聞こえてくる方向へ向かうのを目にする。「アリゾナやニューメキシコで北米インディアンの太鼓や野性的な歌」を聴いたことがあるケイトは聞こえてくる太鼓に心惹かれて、男たちが集まる方へ足を向ける。

ケイトが耳にした太鼓の音は、ケツァルコアツル神を信仰する現地のメキシ

コインディアンたちが宗教的な儀式をこれから行うことを人々に告げ知らせる合図であった。ケイトは広場の空き地に松明のあかりのなかで円形となつて座っている半裸体の男たちを見て、「彼らの柔らかく赤銅色のインディアンの特異な美しさを持つ身体」their bodies soft and ruddy with the peculiar Indian beautyに魅了される。「彼女には、ここに、ここにだけ、生命が奥深い新しい炎をあげて燃えているように思われた。」here and here alone, it seemed to her, life burned with a deep new fire. しかし同時に、ケイトは「その奇妙な重々しさ、暗い水のように精神を大地の中に沈ませるもの」、the strange heaviness, the sinking of the spirit into the earth, like dark water「青白い顔をした者の精神の方向とは逆へ向かう沈黙の濃密な動き」the silent, dense opposition to the pale-faced spiritual directionに反発を感じる。それで彼らと「彼女は接触しないでいられるようにその集まりの外辺にいるほうを選んだ。」she preferred to be on the fringe, sufficiently out of contact.

宗教的な儀式は一人の年老いたインディアンが周りの群衆に向かってケツアルコアツルの神話を語ることから始まる。彼はメキシコの民族的な神であるケツアルコアツルのメキシコの地への回帰を語る—はるか遠い昔、ケツアルコアツルという一人の神がやって来て、「暗い太陽」the dark sunに働きかけ、メキシコの地に人間が誕生する手助けをする。彼は人々に生きる力と生きる術を教え、自分のことを忘れるなど人々に告げる。しかしやがて人々は彼のことを忘れ、顧みなくなる。それで彼は枯死する瓢箪の蔓の様に萎びていく自分の身を嘆き、彼をメキシコの人々から彼の故郷へ帰してくれるように「暗い太陽」に訴える。ケツアルコアツルの神がメキシコの地を去った後に、東洋から白人たちが十字架上で死んだ神イエスと聖母マリアを持ってやってくる。しかし今、人々を死後に神の国へ導き、癒しと慰めをもたらす神としてやってきたイエスも聖母マリアも往時の力を失い、メキシコの地から出て行こうとしている。そして再び力を取り戻したケツアルコアツルの神が「明けの明星」the Morning Starの姿でこの地にやって来ようとしている—このように話し続けたあと、老人は「われらから去っていた者たちは帰り来つつある。来ていた者たちは去りつつある。ようこそと言ひ、さらばと告げよ」と、聴衆に言って彼の話を終える。

老人の語りのあとにはインディアンの歌と踊りが観客も部分的にそれに参加

する形で続き、やがて儀式はクライマックスを迎え、男女が二つの輪となって踊る場面となる。ケイトはインディアンの男性から相手を求められて、フアナに促され不本意ながらも踊りに参加する。しかしこの踊りはケイトに彼女がこれまで知らなかった新しい経験を齎す。

インディアンの歌声と太鼓が踊りの囃子ように鳴り響くなかでケイトはインディアンの男性に手を取られながら踊り始める。やがて踊りの輪はゆっくりと回転していき、旋回する踊りのなかで男たちや女たちは各自の個別性を失い、一つの大きな生命の流れを構成する「大いなる男性」と「大いなる女性」となる。ケイト自身においても彼女の個的自己や女性が消えて「大いなる自己」や「大いなる女性」が出現するのを経験する。そして「彼女の指がインディアンの男性の指と触れ合っているところから、明けの明星のような静かな火花が光り輝いている」のをケイトは感じる。この場面は本文では次のように表現されている：

Men and women alike danced with faces lowered and expressionless, abstract, gone in the deep absorption of men into the greater manhood, women into the great womanhood. . . She was not herself, she was gone, and her own desires were gone into the ocean of the great desire. . . The slow, vast, soft-touching revolution of ocean above upon ocean below, with no vestige of rustling or foam. Only the pure sliding conjunction. Herself gone into her greater self, her womanhood consummated in the greater womanhood. And where her fingers touched the fingers of the man, the quiet spark, like the dawn star, shinning between her and the greater manhood of men. . . She did not know the face of the man whose fingers she held. Her personal eyes had gone blind, his face was the face of dark heaven, only the touch of his fingers a star that was both hers and his. (131)

ローレンスは先に引用した紀行集の別の個所で、古代の先住民族の歌や踊りには個人的な単独な経験の要素は全く含まれず、そこにあるのは総称的、非－個人的、種族的な経験であると語っている。<sup>4)</sup>この意味で、ケイトはケツァルコアツルの神を祭る踊りを通して古代の民族の非－個人的な世界へ没入する経験をしたと云えるだろう。

さらにここで、男性と女性が個的領域を脱け出たところで持つことができる

調和的な世界が暗示されていることは注目に値する。特に引用の最後の数行は個人の領域を超え出たところで男性と女性が出会ったときに共有する神秘的な生命の世界をケイトが垣間見たことを告げているように思われる。二人が共有する神秘的な生命は明けの明星 the dawn star の比喩を用いて表され、その生き生きとした生命の新しい創造的な輝きは「静かな火花」the quiet spark として表現されている。

村の広場での輪の踊りのなかでケイトは「大いなる女性」へ脱却するという経験をし、新たな生の領域を覗き見ることができて、彼女の生活は順調に歩み出したように見えた。しかし、湖畔に強盗の一団が現れ、独り暮らしの家や備えの十分でない家を狙って強盗を働くという事件が起き始めた。不穏な空気が湖畔の村々を覆い、人びとは恐怖の夜を過ごすようになった。女中のフアナはケイトの家の離れで二人の娘と暮らしていたが、ケイトは屋敷に独りで暮らし、原始的な暗闇が支配するメキシコの夜を恐怖に怯えながら過ごしていた。そして実際に或る夜、彼女の屋敷に泥棒が入ろうとする事件が起き、彼女は身体が凍りつき麻痺するほどの恐怖を味わう。これによって彼女の心にメキシコの土地とメキシコの人々に対する恐怖と不信感が再燃する。西洋人のケイトにとって、「浅黒い肌をした種族」のメキシコの人びとは「人間の進化の過程において過去の周期に属している」人たちであり、「その穴から決してこれまで這い出ることができなくて今もそこに取り残されていて」、「この特定の白人のレベルまで這い登ってくることができないだろうと思われる」人たちであった。彼らは征服された民族として征服者の西洋人に対する敵意を潜在的に蔵し、西洋の白人をいつでもその穴の中へ引きずり込もうとする人たちであった。ケイトの脳裏に「我々において乗り越えられた古い生活様式へ逆戻りすることは邪悪なことだ。これは殺人と欲情をもたらすものだ。」evil was the lapsing back to old life-modes that have been surpassed in us. This brings murder and lust. という彼女の元夫のジョアキムの言葉が脳裏に蘇ってくる。ケイトは彼女が参加した土曜の夜の輪の踊りを思い浮かべ、これも古い野蛮な世界への逆戻りであるので、邪悪なものであるだろうか、と自らに問いかける。そして問いかけを通して彼女は土曜日の踊りは為す術もなく慌てて過去の世界へ逆戻りするというような行為ではなく意識的に注意深く選ばれてなされた行為であるというこ

とを確認する。つまり、それはきちんと目的をもって行われた行為であることを彼女は認識する。これによって彼女は古い生の様式へ立ち返ることの正当性と意味を見出す。彼女は考える—私たちは立ち戻って古いつながりを持ち上げなければならない。私たちと宇宙の神秘とを結びつけるだろう古い、断ち切れた衝動を再び取り上げなければならないのだ。私たちはそれをしなければならぬ。ドン・ラモンの言うことは正しい。彼は本当に、偉大な人間にちがいない We must go back to pick up old threads. We must take up the old broken impulse that will connect us with the mystery of the cosmos again. We must do it. Don Ramón is right. He must be a great man, really.—と。

ケイトはこのようにしてメキシコの人々が見せる蛮行に生命の危険を感じるが、そのなかで彼らの古代の民族が持っていた古い生の意識、物活論的な世界の意識へ立ち返る必要性をあらためて悟り、彼女の内に湧いた彼らに対する恐怖を克服する。泥棒侵入未遂事件のあと、フアナの計らいで、フアナの息子のエゼキエルが銃を持ってケイトの寝室のドアの前で夜泊まることになり、これ以後ケイトは夜にエゼキエルのいびきに悩まされることはあっても身の安全に不安を感じることはなくなる。

さてケイトがサユラ村に移ってきて十日ほど経った頃、ドン・ラモンから彼の妻と彼女の屋敷を訪問するという手紙が届く。

ラモンと共にやって来たドニャ・カルロータ Doña Carlota は細身で上品で少し驚いた表情を浮かべた大きな眼を持ち、柔らかい褐色の髪をした女性であり、血統的にはスペイン人の父親とフランス人の母親とを持った生粋のヨーロッパ人であった。また、彼女は熱心なカトリック教の信者であり、メキシコ市でカルメル会の修道女とともに捨て子のための養育施設 Cuna の運営に従事していたのであった。ケイトはドニャ・カルロータの話から彼らの二人の息子がアメリカの学校に行っていることやその慈善活動のために彼女がメキシコ市に大半滞在していることを知る。さらに、ケイトはラモンとカルロータの夫婦関係がうまくいっていないと、二人の間に対立と衝突が生じていることを感じる：カルロータはラモンを愛していたが、その愛は「今やほとんど意志と化した愛」love that now nearly all *will* であった。「彼女は彼を敬愛していたが、今や敬愛することを止めなければならなかった。彼女は彼に異論を唱えなければならなかつ

た。」She had worshipped him, and she had had to leave off worshipping him. She had had to question him. 一方ドン・ラモンは彼の妻がケイトに捨てて子を救う彼女の慈善活動について語っているとき、「無表情に座り、注意を向けるともなく聞いていた。妻の感情の慈善的な振動に対して、がっしりとして不動だった。彼女に思うままにふるまわせていたが、彼女の仕事や行き方にたいしては、黙々と重々しく、不変の反対をつづけていた。」Don Ramón sat there impassive, listening without heeding; solid and unmoving *against* the charitable quiver of his wife's emotion. He let her do as she would. But against her work and against her flow he was in silence, heavy, unchanging opposition.

物語はこのあとケイトがカルロータの誘いに応じてドン・ラモンの農園ハミルテペク Jamiltepec を訪問する場面へ移るが、私たちは上述した二人の立場の相違と感情的対立は今や修復不可能で、その亀裂が決定的ものであることを知る。ハミルテペクを訪れたケイトが屋敷の何処かから聞こえてくる太鼓の音を耳にしてカルロータに尋ねると、カルロータはドン・ラモンがインディアンに叩かせている太鼓の音だと答える。そしてカルロータは古代の神々を呼び戻そうとしている夫の行為は間違っていて、「夫が間違ったことをしようとするときには妻は止めようとしなければならない」 a woman must try to prevent a man, when he is going wrong と述べ、ケイトに助力を頼む。ケイトは愛する夫がアイルランドとアイルランドの人々のためにその命を犠牲にした辛い経験を過去にしたことから、同じ女性としてカルロータの妻としての立場に理解と同情を示し、男性は虚栄心が強いから妻がどんなことを言ってもどんなことをしても役に立たない、と言って慰める。昼食の時にカルロータは、今日はケイトが訪問しているし、彼女自身も明日はメキシコ市に帰るので、今日だけでも彼女たちに不快な思いをさせるあの太鼓を鳴らすのを止めてもらえないか、と夫に求める。これに対してドン・ラモンは腹を立て、三人で食卓を囲んでいても彼自身を二人の女性から引き離して自らの意識のなかに閉ざしてしまう。

この二人の対立は、夫と妻の、男性と女性の対立という一面も確かにあるが、それと重なり合う形で先に述べた古代の物活論的生の意識と西洋の知的精神的生の意識との対立という別の側面もあるように思われる。ドン・ラモンの考えでは、ヨーロッパ人がメキシコを征服したときに一緒に持ち込んだ西洋文明と

キリスト教はメキシコの人々に何の救いも齎さず、イエスも彼らの救世主とはなりえなかった。それで彼はその征服以前にメキシコインディアンたちが信じていて、いまなおメキシコの人々の存在の奥底に残存するケツアルコアツルを主神とする古代の神々への信仰を彼らの裡に呼び起こし、新たな生の息吹を吹き込み、彼らが豊かな生を営むことができるようにしようとする。ケツアルコアツルの宗教運動によってドン・ラモンが為そうとしていることはキリスト教も含めた西洋の知的精神的生の否定であり、古代の物活論的生の復活である。これに対して、カルロータは「生粋のヨーロッパ人」pure European と紹介されているように、ドン・ラモンが否定しようとしている西洋の知的精神的生そのものを体現する人物である。彼女が夫の行為が間違っていると信じてそれを止めようとするのは当然である。ケイトに助力を求めるケイトとの会話のなかで、彼女はドン・ラモンがこのまま宗教運動を続けることは彼が彼女かいずれかの死を招くことになり、「そして私のほうが死ぬことになるでしょう、たとえ彼が間違っていたとしても。彼が殺されない限りは」And I shall die, though he is wrong. Unless he gets killed. と話す。これは二人の対決がどちらかが死なない限り決着を見ない類のものであることを示し、二人の対決が実質的には二つの生の様式の対立であることが暗示されていると見做すことができる。

一般的に愛情というものは、自分を他者と一つに結び付けようとする、自分の内部から自発的に湧き起こる感情の自然な発露であると考えられる。しかし、カルロータの場合愛はむしろ彼女の頭のなかに在る愛のイメージ、抽象化された愛であり、そしてその抽象的な愛は先に引用した箇所に見られるように、「しなければならない」‘had to’ ‘must’ という意志と直結していて、彼女の愛が硬直したもので内的感情の自然な発露というものからほど遠いことを示している。彼女はメキシコ市へ向かってハミルテペクを立ち去る日の朝、夫の寝室を訪れて、最後の説得を試みる。彼女は「ラモン、メキシコを救うのはあなたではない。キリストがもうすでに救われているから」It isn't for you to save Mexico, Ramón. Christ has already saved it. と言う。ラモンは反論して、「キリストはメキシコを救うことができなかった」と述べ、古代のケツアルコアツル神を讃える宗教運動を為すことによって「彼がただ望んでいることはメキシコの人々が彼ら自身の男性、彼ら自身の女性へ到達する道の始まりを見つけ出す

ことだ。男たちはまだ完全な男になっていないし、女もまだ女になっていない。彼らはみんな中途半端な者で、調和の取れた者ではなく、いくらか恐ろしく幾らか哀れな、幾らか善良な者だ。彼らは道半ばにある者たちだ。」“All I want them to do is to find the beginnings of the way to their own manhood, their womanhood. Men are not yet men in full, and women are not yet women. They are all half and half, incoherent, part horrible, part pathetic, part good creatures. Half arrived.”と、ケツアルコアツル神の復活を企てる彼の信条をカルロータに伝える。すべての人間にとって人生の目的は己の生の完成であるというのがローレンスの基本的な考え<sup>5)</sup>であるが、この考えを代弁する形で、ドン・ラモンはケツアルコアツル神への信仰を通して古代の生の様式へ立ち帰ることによってメキシコの人々は彼ら自身の生を完成させることができると、主張しているのである。結局二人は互いに譲ることなく自分の立場を主張したまま別れることになる。そして、のちに彼女の予言が現実となり、カルロータはドン・ラモンが彼自身をケツアルコアツル神の化身とする宗教的な儀式をサユラの教会で執り行っている最中に、教会の堂内で奇声を発して身体を痙攣させ口から泡を吹き、癲癇と思われるような発作を起こし、不幸な死を遂げる。生粋の西洋人であるカルロータの死はこの物語においてメキシコにおける西洋の知的精神的生の意識の敗北を象徴的に表すものと言えるだろう。

ケイトへ話を戻すと、彼女もこのような悲劇的な死を遂げるカルロータと同じ西洋人の女性である。然しケイトは物語のなかで度々言及されてように、生粋の西洋人ではなくアイルランド人の女性である。アイルランド人であるということで、彼女は浅黒い肌をした人種のメキシコ人と人種的に近くて、それで彼らの神秘的な生をいくらか感じ取ることができるのである。<sup>6)</sup>ケイトはその容姿やその意識の表層においては西洋人の女性であるが、その存在の奥底の無意識的な領域にはアイルランドの古代のケルト民族の記憶を残し、その体内にはその民族の血を宿している。彼女がカルロータのような悲劇的な死から救われ、ドン・ラモンのケツアルコアツル神の宗教運動に魅力を感じるのは、彼女の体内にある古いケルト民族の血の所為である。ケイトはその存在の意識の表層においては西洋の知的精神的生の意識を有する女性であるが、その無意識的領域においては古代の生の記憶を留める女性である。この二重の生の意識をその存

在の裡に抱え、この二つの意識に心を揺らしながらケイトは彼女の新しい生き方を求めて模索を続ける。

ハミルテペクをケイトが訪れた日に、ドン・シプリアーノも軍の駐屯地であるグアダラハラ Guadalajara から午後に来て来る。そしてお茶のテーブルがテラスに用意され、ケイトはその席で軍服姿のシプリアーノと再会する。偶々二人だけがテラスに残り会話をする場面となったとき、シプリアーノはその眼に不思議な欲望を漂わせながら彼女を見詰め、「もしあなたが結婚しようと思われることがあれば、あなたと結婚したい、あなたと結婚したいと思う。」と、ケイトに向かって語る。シプリアーノからのこの求愛の言葉にケイトは「二度と結婚することはないと思います」と素早く返答をする。然し、その言葉とは裏腹に、「心ならずも息を詰まらせたように彼女の胸は大きく波打ち、彼女の顔は朱を刷いたように一面紅く染まる」 her bosom heaving like suffocation, and a dark flush suffusing over her face, against her will という別の反応を彼女はまた示す。この彼女の言葉と身体の反応の不一致は、彼女がシプリアーノを全面的に拒否しているのではなく、その身体的無意識的なところでは彼の求愛に心を動かされている面もあるということを告げている。

ドン・ラモンが着替えを済ませ、テラスへやって来て、二人の会話に加わる。「あなたはご自分を白人だとお考えにはなりませんの？」と、ケイトはラモンに幾らか無作法な質問をし、それに対してラモンは「実際以上に白いとは思いません。少なくとも百合のように白いとは」と答える。今度はラモンが「あなたは褐色の肌をした人々を好きではないのですね？」とケイトに尋ねると、ケイトは「見る場合は美しいですが、私は自分が白人であることを嬉しく思いますわ」と答える。そして、「褐色の肌をした人々との接触は全く考えられないと感じているのですね？」というラモンの質問に、ケイトはその通りだと答える。このラモンとケイトの会話が、シプリアーノの求愛のすぐあとの会話であることやシプリアーノが褐色の肌をした生粋のメキシコ人であることを考え合わせると、ケイトは間接的にシプリアーノとの接触は考えられないと表明していると見做されるだろう。実際ケイトはラモンを敬愛し、「彼との接触は彼女がこれまで知っているどんな接触よりも貴重なものである」 the contact with him was more precious than any contact she had known と、その接触を大切に思うけれど、シプリアー

ノに対しては「彼女に侵入してくるように思えた」‘seemed to trespass on her’ という表現に見られるように、無理に接触を求めてくる強引さを感じている。西洋人女性のケイトにとってラモンは同じ西洋人であるが、シプリアーノは褐色の人種 dark race に属する異人種の男性であり、彼との間にあるこの人種の違い、人種的な隔たりをケイトは強く意識せざるを得ない。ケイトが西洋人の女性であるという意識を堅持し続ける限り、異人種であるシプリアーノの求愛を受け容れる余地はないように思われる。先に引用したケイトの言葉「私は白人の女性であることを嬉しく思いますわ」I am glad I am white はその不可能性への言及であると思われる。この様にケイトが人種的な隔たりを強く意識し、シプリアーノを拒否する背後には、西洋人の女性であるケイトが多分に西洋の知的精神的意識をその生の意識として有し、その意識の側に立って古代の無意識的的意識をその生の意識とするシプリアーノに直面しているという事情がある。ここでの人種の問題は二つの生の意識の対立と相克の問題であるという風に見ることができる。

## Notes

\* 本論考では、D. H. Lawrence, *The Plumed Serpent* (Penguin Twentieth-Century Classics, 1995) をテキストとして使用している。本文中の引用はすべてこの版による。また括弧内の数字はテキストのページ数を表す。なお、訳出については『翼のある蛇』上下巻(角川文庫)宮西豊逸氏の訳を参照させていただいた。

- 1) ‘She had thought that each individual had a complete self, a complete soul, an accomplished I. And now she realised as plainly as if she had turned into a new being, that this in not so. Men and women had incomplete selves, made up of bits assembled together loosely and somewhat haphazard. Man was not created ready-made. Men today were half-made, and women were half-made.’ (105-6)
- 2) ‘The animistic religion, as we call it, is not the religion of the Spirit. A religion of spirits, yes. But not of Spirit. There is no One Spirit. There is no One God. There in no One Creator. There is strictly no God at all: because all is alive.’  
*Mornings in Mexico and Other Essays* (The Cambridge Edition of the Letters and Works of D.H. Lawrence), p81.
- 3) ‘The Indian way of consciousness is different from and fatal to our way of consciousness. Our way of consciousness is different from and fatal to the Indian’s. The two ways, the two streams are never to be united. They are not even to be reconciled. There is no bridge, no canal of connection. . . . The consciousness of one branch of humanity is the annihilation of the consciousness of another branch. That is, the life of the Indian, his stream of conscious being, is just death to the white man. And we can understand the

consciousness of the Indian only in terms of the death of our own consciousness. . . . The only thing you can do is to have a little Ghost inside you which sees both ways, or even many ways. But a man cannot belong to both ways, or many ways. One man can belong to one great way of consciousness only. He may even change from one way to another.’

Mornings in Mexico and Other Essays (The Cambridge Edition of the Letters and Works of D.H. Lawrence), p61-2.

- 4) ‘He will tell you it is a song of a man coming home from bear hunt: or a song of to make rain: or a song to make the corn grow: or even, quite modern, the song of the church bell on Sunday morning. . . . But the man coming home from bear hunt is any man, all men, the bear is any bear, every bear, all bear. There is no individual, isolated experience. It is hunting, tired, triumphant demon of manhood which has won against the squint-eyed demon of all bears. The experience is generic, non-individual. It is an experience of the human blood-stream, not of the mind or spirit.’ Mornings in Mexico and Other Essays (The Cambridge Edition of the Letters and Works of D.H. Lawrence), p62.
- 5) 拙稿「“Aaron’s Rod” について」において述べたように、このローレンスの基本的な考えについては、Reflection on the Death of a Porcupine and Other Essays (Cambridge Edition, 1988) の Introduction XXXii–XXXiii を参照のこと。
- 6) ‘Ah the dark races! Kate’s own Irish were near enough, for her to have glimpsed some of the mystery.’ (148)

#### 参考文献

- 1 *Mornings in Mexico and Other Essays* (The Cambridge Edition of the Letters and Works of D.H. Lawrence, 2009)
- 2 L.D. CLARK , *DARK NIGHT OF THE BODY; D. H. Lawrence’s The Plumed Serpent* (University of Texas Press, 1964)
- 3 Neil Roberts, *D.H. Lawrence, Travel and Cultural Difference* (PALGRAVE MACMILLAN, 2004)